子どもたちの笑い声を守りたい

三上あけみ
福島県福島市　六華学童クラブ　指導員

東日本大震災から四年半が過ぎました。あわただしく過ぎる世の中に、あの出来事が私のなかですら風化されつつあるいま、記憶を呼び起こし、福島の一つの学童クラブ、一人の指導員の目から検証していきたいと思います。あの天災が私たちになにをもたらし、どのような警鐘を鳴らしたのかを忘れないために……。

六華学童クラブは保護者会が運営しており、福島市の中心市街地に位置する福島市立三河台小学校の敷地内にある旧幼稚園舎で開設しています。二〇一一年当時は、定員七〇名の大規模学童クラブでした（二〇一五年四月に分割され、現在は定員四〇名の二つの学童クラブとして同じ施設内で運営されています）。

あの日、いつものように黄色い帽子をかぶった一年生が、「ただいま」と押しあいへしあいしながら学童クラブに帰ってきました。「おかえり」と出迎える私たちに、矢継ぎ早に学校での楽しかったことやけんかしたことなどを話してくれます。指導員と楽しく会話をしながら、着替えや手洗いをすませ、宿題をします。「宿題終わったから先生遊ぼう」。指導員とぬり絵やブロック遊びがはじまります。おだやかな日常があたりまえのようにそこにありました。

二時四五分、指導員の携帯電話が一斉に鳴りました。「強い揺れに警戒してください」。聞いたことのない事態に緊張が走ったのと同時に、ゴォーッという音とともに地面が大きく突き動かされました。とっさに子どもたちの腕をつかんで外へ出て、校庭のまんなかに走りました。建物のなかに留まるという選択肢が浮かばないほどの大きな揺れでした。耳をつんざく地鳴りとともに、地面は丸ごとユッサユッサと揺れています。一年生一〇人を必死で囲み、座り込みましたが、私たちも台地に揺さぶられるままです。

長い揺れが一時的に収まると、学校から子どもたちが校庭に避難してきました。どの子も青ざめて不安でいっぱいの表情です。くり返す強い余震に悲鳴があがり、吹雪のなか、「大丈夫。先生たちとみんなでいるから大丈夫だよ」と手を握り、抱きあいながら、子どもたちを必死にはげましつづけました。

学童クラブの子どもたちはほかの子どもたちと共に、校舎の耐震工事中に建てられた仮教室用のプレハブでお迎えを待ちました。日も暮れて停電で暗い闇のなか、学校が石油ストーブを用意してくれ、その明かりと暖かさに救われました。不安につぶされそうな子どもたちの肩を抱き寄せながら手遊びなどをすると、少しずつその表情に安堵が見られ、笑みが戻ってきました。お迎えに来た保護者を見つけると、子どもたちはわ～っとその手のなかに飛び込んでいきます。最後の子どもが保護者と帰ったのは、二〇時過ぎでした。

ところがその後、原子力発電所での水蒸気爆発が、約八〇キロ離れた福島市にも影響をおよぼすこととなります。その日から、目には見えない放射能の脅威との闘いがはじまります。情報が錯綜し、なにが安全なのか、誰の言葉を信じていいのかわからない日々がつづきます。学童クラブでも、他県へ避難していく子どもが何人かいました。

そして、福島に残ることを選択した子どもたちとの学童クラブでの生活がはじまりました。施設内の放射能の数値を計り、すべての窓を閉ざしました。外遊びを禁じ、マスクをして被爆線量バッジを胸にさげる……。公園や校庭から子どもたちの姿が消えました。のびやかに遊びたい子どもたちに、外遊びや虫や花にふれるのを禁じるのはつらいことでした。室内だけの生活にストレスが溜まり、情緒が不安定になっていくのがわかりました。

そんななか、全国から寄せられたあたたかい支援にどれほど助けられたことか……。おいしいリンゴや本、たくさんの松ぼっくり、安全な自然のなかで思いっきり遊ぶことができたバス旅行。子どもたちが楽しく遊ぶ笑い声に、私たち指導員もどれだけいやされたことか、感謝でいっぱいです。

福島市では現在、除染も進み、環境放射能数値もさがり、外遊びも窓を開け放つこともできるようになりました。しかし不安がすべて取り除かれたわけではありません。降り注いだ放射能の恐怖は消えることはありません。急な災害が起きたとき、学童保育を必要とする子どもが一人でも恐怖にさらされることがないように、学童クラブの増設を希望します。安全に安心して過ごせる環境のなか、子どもの笑い声を絶やさないことが大人の責任だと思います。